

## 【 論文 】

# 吉谷覚寿の思想と井上円了<sup>1</sup>

佐藤厚

## 1. 問題の所在

題目に掲げた吉谷覚寿（1843–1914）と井上円了（1858–1919、以下円了と略称）は、東京大学における師弟の関係である。本論文は、この二人の関係を問題とする。

簡単に言えば次のようになる。第一に、両者は師弟関係であるから、吉谷から円了に与えた影響というのがある。そして吉谷の影響を受けて円了は自分の学問を構築していった。第二に、しかしそうした弟子の学問を師である吉谷が批判するのである。

その際のポイントとなるのは何か。それは円了が説く仏教と西洋哲学とが一致するという考え方（以下、仏教哲学一致論）である<sup>2</sup>。筆者は、この仏教哲学一致論に関心を持ち、その背景を調査してきたが、最近わかったことは、その「前提」として吉谷覚寿の思想があるということである<sup>3</sup>。そうすると吉谷が準備した仏教哲学一致論の前提を発展させて円了が完成させたということがいえる。

しかし、歴史は複雑である。吉谷の考え方を発展させて構築した円了の思想を、今度は師匠の吉谷自身が批判するのである。その原因がどこにあるか。それを明らかにするのが本論の目的である。行論の次第は、まず吉谷自身の思想を探り、その上で円了の思想との関係を見ることにする。

この考察により、我々は、これまで知られていなかった円了思想の形成の過程を理解することができるようになるであろう。

## 2. 吉谷の略歴

吉谷は現在の岐阜県出身で、真宗大谷派の学問所である高倉学寮で修学し、1877年（明治10）、大谷派の東京教校教授に就任、1881年（明治14）、東京大学講師を経て、1885年（明治19）東京教校長となる。1890年（明治23）擬講、高倉学寮教授に就任。1896年（明治29）嗣講に進む。1901年（明治34）講師。1911年（明治44）大谷大学教授となる。高倉学寮の重鎮として権威があった。著作は、初期のものには『仏教大旨』、『仏教総論』、『明治諸宗綱要』といった仏教全体を扱う著作が多く、後になると『三帖和讃講述』、『六要鈔講讃』など真宗関係の著作が中心となる。

吉谷は1881年（明治14）から1890年（明治23）まで東京大学で仏教学の講義を行なった。吉谷が東京大学に来た経緯は次のようなものである<sup>4</sup>。東京大学総理であった加藤弘之（1836–1916）が東京大学に仏教学の講義を設けるにあたり、島地黙雷（1838–1911）の推薦により、まず曹洞宗の原坦山（1819–1892）を招聘した。ところが、加藤と知己であった真宗大谷派・念速寺の近藤という僧侶が原坦山について「禅門の悟道の方にて教相学者にあらず。殊に天台学などは全く学びたることなき人」と述べ、それゆえもう一人、教理専門の学者を招聘するのがよいと進言し、近藤氏の紹介で吉谷が講師となったという。教理を期待された吉谷は、東京大学で『八宗綱要』、『天台四教義』の講義を行った。

東京大学での講義の様子について、学生として講義を聴講した三宅雪嶺（1860–1945）は、「八宗綱要を教科書にし、一々文語体で筆記せしめ試験にもその筆記通りにさせた。そういうのを学僧というのであろう。」と述べている<sup>5</sup>。ここから吉谷が伝統的な方法で緻密に講義をしていた様子が窺える。円了は1883年（明治16）に吉谷の講義を受講したほか、1885年（明治18）には、吉谷の講義を筆録したノート『八宗綱要』を作成している<sup>6</sup>。

## 3. 吉谷の思想

続いて吉谷の思想、特に初期に展開した仏教体系について見ていく。仏教体系とは、文字通り、仏教とはどのような体系で構築されているかをいう。これは現在で

は珍しくないが、明治初期においては重要であった。江戸時代の仏教は、基本的には宗派の学問が中心であり、仏教全体に通じる理論構成を必要としなかった。しかし、明治時代になると、廃仏毀釈、キリスト教の進出とそれに基づく仏教批判に対応するために、「宗派」ではなく「仏教」という枠組みでの理論構築が必要とされたのである。ここでは吉谷の三つの著作をとりあげる。

### 3-1 「因果法爾説」(1882年、明治15年)

吉谷の初期論文に「因果法爾説」<sup>7</sup>(『仏教演説集誌』、1882年、明治15年)という短編がある。仏教は多くの門に分れるが、迷いを転じて悟りを開く(転迷開悟)が目的であり、その要点は因果の道理にあるとする。その内容は次のようになる。

#### 1. 内道(仏教)

- (1) 世間の因果(流転輪廻の有漏の因果)
- (2) 出世間の因果(転迷開悟の無漏の因果、声聞、縁覚、菩薩)

#### 2. 外道(仏教以外)

- (1) 邪因邪果・・・大自在天外道(≒キリスト教)
- (2) 無因有果・・・自然外道
- (3) 有因無果・・・断見外道
- (4) 無因無果・・・空見外道

まず因果を1.内道(仏教)、2.外道(仏教以外)の二つに分け、内道を(1)世間の因果(流転輪廻の有漏の因果)、(2)出世間の因果(転迷開悟の無漏の因果、声聞、縁覚、菩薩)の二つに分ける。続いて外道を、(1)邪因邪果(大自在天が万物を生ずるという外道)、(2)因が無くても果が有るという自然外道、(3)因は有るが果は無いという断見外道、(4)因も無く果も無い空見外道の四つに分ける。

ここで注目されるのは、(1)邪因邪果の項目で、吉谷はこれがキリスト教と同じ考えであるとする<sup>8</sup>。批判の論点は二つである。第一に、天は万物の因ではないということ。すなわち、人は人を、家畜は家畜を生むように、ものは同じものから生まれる。これに対して一の自在天から万類の果が生じるのは不合理な説であるという批判である。第二に、仮に万物を造化する大自在天があるとした場合、草木禽獣の

中、桜や梅のような良いものと、虎狼のような憎むべきものがあるのはなぜか。また人類でも容貌の良し悪しや長寿短命の違いがあるのはなぜか。これは大自在天の不完全さを表わすものであるという。この第二の批判は、中国唐代の宗密『原人論』にも、全てを生みだす虚無の大道を批判する部分に見えるものであり<sup>9</sup>、その歴史は古い。このキリスト教批判は以後の『仏教大旨』「3 正因正果」<sup>10</sup>、『仏教総論』「6 正因正果」<sup>11</sup>も同様である。以上、本論文は短編ながら、吉谷の基本的な思想を知ろううえで重要な著作である。

### 3-2 『仏教大旨』（1886年、明治19年）

吉谷は、1884年（明治17）から1885年（明治18年）にかけて『令知会雑誌』（島地黙雷を中心とする仏教系雑誌）に「仏教大旨」を連載し、1886年（明治19年）に単行本として刊行した<sup>12</sup>。著述の目的は、仏教は幽玄広博であり、容易にそのポイントを知るのは難しい。そこで自分は諸宗の典籍を読んでそのポイントを記録した<sup>13</sup>というものである。

さらに、近年仏教を批判する者が多いが、それらは仏教を本当に理解して批判しているのではない。その中、大乘非仏説などは今に始まるものではないが、ある人は次のようにいう。仏教がすばらしいのは造化教（キリスト教）の比ではない。しかし、涅槃すなわち畢竟空を教えの極意とすることについては、自分は取らない。これは自分だけでなく社会一般についても同様である。また真空無相、空理寂滅という言葉にとらわれて誤解し、理体を空無とするような間違った考えがある。こうした「名字の糟粕に泥酔せる皮相論者の妄破」は往々にして当たらない。しかし、これらを仏教者は対岸の火事と見ずに、仏教の大旨を明らかにして妄想論者の狙撃の当否を識別し、防護をしなければならないと述べる。

内容は1. 略して仏教の大旨を明す、2. 広く問答を設けて反復弁論す、の二門に分かれる。

1. 略して仏教の大旨を明すでは、仏教の大旨を、「迷いを転じて悟りを開く（転迷開悟）の要路を示す」と定義する。さらに迷悟の体は真如実相の一理であるとす。この迷悟の体を設定するにあたっては、「輓近、西洋の哲学大に世に行なはれ覆載間、万物の原理を論及せんとす、故に仏家に於ても諸法の本源を研究せずんばあるべからず」と述べ、西洋哲学においてと同様、仏教にも原理があるべきだという

考え方から出たものであることを述べる。次いで迷悟の別を六穢四淨（六道と三乗、仏。六凡四聖とも）に分ける。そして最後に六凡四聖の中、六凡の迷を転じて四聖の悟を開くを仏教の大旨とする、とまとめる。

続いて「2. 広く問答を設けて反復弁論す」では、1、迷悟体性、2、諸法原理、3、正因正果、4、仏性名義、5、空理涅槃、6、三界唯心、7、宗教分派、8、真俗二諦、9、三法印義、10、総決料簡の10門を設ける。これらの中、前に見た「因果法爾説」の内容は3、正因正果にあたる。そしてその前の1迷悟体性、2諸法原理には因果の因となるものが置かれ、さらに4、仏性名義、5、空理涅槃、6、三界唯心は果に相当するものが説かれる。そして7、宗教分派、8、真俗二諦、9、三法印義、10、総決料簡と続く。このように、『仏教大旨』は、「因果法爾説」を拡張し、より体系化させたものと考えられる。

### 3-3 『仏教総論』（1890年、明治23年）

吉谷は1890年（明治23）、『仏教総論』を刊行した。これは10門構成であった『仏教大旨』を15門に拡大したものであるが、基本的な構図は変わっていない。また吉谷は同年、『明治諸宗綱要』を刊行した。これは凝然『八宗綱要』に倣い、明治中期に日本に存在した仏教宗派の綱要をまとめた書物である。吉谷によれば、『仏教総論』は総論にあたり、『明治諸宗綱要』は別論にあたる。よって仏教全体の要旨、および各宗別立の法義を知ろうとすれば、この二書を読むとよいと述べる<sup>14</sup>。

以上、初期の吉谷の思想について、三つの論著を通して見た。参考までにこれらの構成を対比させると次のようになる。

<図表1>

「因果法爾」(明治15)	『仏教大旨』(明治19)	『仏教総論』(明治23)
因果法爾	1、迷悟体性 2、諸法原理 3、正因正果 4、仏性名義 5、空理涅槃 6、三界唯心 7、宗教分派 8、真俗二諦 9、三法印義 10、総決料簡	1、諸法原理 2、真如名義 3、真俗二諦 4、唯心所現 5、諸法縁起 6、正因正果 7、業感不同 8、善等三性 9、仏教種類 10、仏教宗派 11、三法印義 12、転迷開悟 13、厭欣義趣 14、信行得果 15、華報果報

#### 4. 吉谷と円了との関係

続いて吉谷と円了との関係を考察する。ここでは1. 円了の仏教体系に与えた吉谷の影響、2. 吉谷の円了批判を見る。

##### 4-1 円了の仏教体系と吉谷

まず『仏教活論序論』(1887年、明治20年)に基づいて円了の仏教体系を見る。

##### (1) 円了の仏教体系

① 仏教は哲学(智力)と宗教(情感)とから構成される

円了は仏教全体の分類として浄土教の教判である聖道門と浄土門の分類を取り上げる。そして聖道門を自力難行、浄土門を他力易行と規定し、さらに聖道門を、知者学者を対象とする教え、浄土門を愚かな人々を対象とする教えであるとする。こ

れを宗派で言えば、俱舎宗、法相宗、天台宗、華嚴宗が聖道門にあたり、浄土宗、浄土真宗が浄土門にあたるという<図表2>。次いで、人間は智力と情感の二つの心のはたらきを持つとし、仏教は両者を備えるが、キリスト教は情感しか持たないという。そして両者を備えている仏教こそが、現在の文明社会の宗教にふさわしく、将来の道理世界の宗教になるのは仏教のほかにはないことを説く。

<図表2>

	教え	対象	宗派	学問	心のはたらき	キリスト教
仏教	聖道門	知者学者	俱舎宗、法相宗、天台宗、華嚴宗	哲学	智力	無
	浄土門	愚かな人々	浄土宗、浄土真宗	宗教	情感	有

## ② 仏教の哲学的部分

続いて聖道門、すなわち仏教の哲学的部分を詳しく述べる中で、仏教と西洋哲学を一致させる。それは次のような図式となる。

<図表3>

仏教宗派	西洋哲学
俱舎宗	唯物論
成実宗	唯物論から唯心論への階梯
法相宗	唯心論
三論宗	唯心論から中道へ入る階梯
華嚴宗	唯理論
天台宗	

これらの中、仏教宗派と西洋哲学との対応では、俱舎宗は唯物論であること、成実宗は唯物論が極まって唯心論に入る階梯であること、法相は唯心論であること、三論は唯心論が極まって中道に入る階梯であること。そして華嚴宗・天台宗は中道、唯理論であるという。

## (2) 吉谷の影響

私は<図表3>に示される仏教哲学一致論の背景に吉谷の思想があると考えている。吉谷は『仏教大旨』『諸法原理』の中で、諸法の原理について、儒教では太極、道教では大道、キリスト教ではヤハヴェを設定する。西洋哲学にも様々な立場があるが、最近では一理を発見するようになっていく。それでは仏教では諸法の原理は何か。それは真如であるとする<sup>15</sup>。ただ、それには大乘小乗の別があり、小乗（俱舎宗）では「三世実有法体恒有」、大乘の法相宗では「頼耶縁起」、同じく大乘の天台宗、華嚴宗では「真如縁起」を説くという。

そもそも、これら三つの考え方は、江戸時代の伝統的な仏教体系である性相学の枠組み、すなわち小乗教（俱舎宗）、権大乘（法相宗）、実大乘（天台宗、華嚴宗）である。そしてそれらの教理の違いも、いま述べられている説明と同じであるが、私はこれが仏教哲学一致論になるためには、吉谷が、これを他宗教や西洋哲学と比較して「世界発生の原理」と捉えなおしたことが重要であったと考えられる。内容は同じでも、見方を変えたことが円了を刺激し、それらに唯物論、唯心論、唯理論という西洋哲学的な名称を付与し、これにより仏教哲学一致論ができたのではないかと考えている。

このほか『仏教活論序論』に、俱舎宗、法相宗、華嚴宗・天台宗に加えて成実宗、三論宗が出ていることにも、吉谷の『八宗綱要』講義の影響を考えられ、さらに円了の真如縁起の説明も天台教学に多く依っているが、これも天台教理に通じていた吉谷の影響を受けたものと考えている。

## 4-2 吉谷の円了批判

このように円了は吉谷の影響を受けて自己の仏教哲学一致の体系を構築したのであるが、これを吉谷は批判するようになる。論点の中心は、仏教を仏教だけで説明するか、あるいは仏教と哲学、科学を結合させていき新しいものを生み出そうとするかという考え方の違いである。ここでは二つの批判を見る。

### (1) 仏教を智力と情感とに分類することへの批判

円了の仏教体系の第一のポイントは、仏教を聖道門と浄土門とに分類し、それを心のはたらきでは智力と情感とに分けていた（<図表2>）。これを吉谷は、1888年



(明治 21 年) 5 月、「仏教に智力情感の名称を付するの理由無きを弁ず」(『令知会雑誌』50 号) という論文を書いて批判する。まず次のように述べる。

最近、西洋の哲学を勉強した連中の中には仏教の内容に智力と情感という名称を付けているものがある。聖道門は智力の宗教、浄土門は情感の宗教などである。ただ、これは仏教以外の哲学者が勝手に述べていることだから問題ではないが<sup>16</sup>、と述べた後に怒りを込めた次の言葉を続ける。(引用文は読みやすさを考慮してカナをひらがなに改め濁点を付した。以下同じ)

然るに、動もすれば我仏教門中に在りて、而も護法扶宗を以て己れか任とする僧侶其人にして、頻りに彼等に雷同して自ら好んで此名目を唱ふる者あり。嗚呼、何と謂ふことそや。<sup>17</sup>

これは間違いなく円了を指して言った言葉であろう。では吉谷は円了のどこが問題と感じたのであろうか。

吉谷は智と情とを次のように考える。哲学の中で心理を考える際には、智と情の内容に真や妄を立てず、迷や悟を分けない。ただ単に、分別の能力を智と名付け、感動の能力を情と言う。そして両者は互いに関係をもち、智は情によって能力を増し、情は智によって発達する。故に智と情とはどちらかだけを重視してはならない。これに対して仏教の智と情には迷悟、真妄の区別がある。すなわち、迷者の妄想分別より発するものを情といい、悟者の事理において決断の機能あるものを智と名づける。このことを『成唯識論』、『華嚴経』、『大無量寿経』などを引用して論ずる。そして聖道門、浄土門の二門を区別するには難行、易行あるいは此土入聖、他土得証の名目で足りるのであり、智と情というまぎらわしい言葉は使う必要はないという。

以上、吉谷の見解を見たが、この問題の背景には、本来は仏教の漢字語であったが、後にそれを活用して明治になって作られた翻訳語との意味上のズレが背景にある。いまの問題は、智という漢字語は、伝統仏教でいえば英語の wisdom に近いものであり、明治になり英語の intellect の意味が与えられるようになった。吉谷は仏教語としての漢字の意味に忠実な立場であり、円了のような言葉の使い方は許せなかったのである。

## (2) 仏教と哲学との比較に対する批判

続いて仏教哲学一致論に対する批判である。1887年(明治20年)4月、吉谷は『令知会雑誌』37号に「仏教を疎漏視すること勿れ」という論文を発表する。疎漏とは大雑把で不完全という意味である。そこではまず仏教に関する二人の意見を出す。一人は「ある学士」の説で、キリスト教は浅い教えで学問ではないが、仏教はそうではない。これは哲学として扱うべきものであると説いている。また「ある論者」は、仏教と他の学問とを比較する。そして、万有学の重力、物体、活動、霊性学<sup>18</sup>の主観、客観、純全の三靈性は、仏教(ここでは天台学)の十如是、一心三観、理具事造等の解明よりも詳細であると述べている。このほか『華嚴経』の「心仏及衆生是三無差別」を悟るのは思想普遍の作用を知るには及ばない。Hスペンサーの哲学原理、生物原理は真如縁起の談よりも明瞭である、などと言っている。吉谷はこれらに対して「嗚呼、これ何の謂ひぞや」と嘆き批判している。そして、こうした人たちは、仏教が大雑把であると言うが、それは仏教自身を知らないからであるとして、仏教の最高の教えである真如縁起の法門について、天台宗の別理随縁、円理随縁とについて懇切に解説し、世間の論者はこうした書物に基づいて仏教の義理を精密に学んでから批評を下すべきである。自ら大雑把に学んで、仏教が大雑把であると蔑視することなかれと戒めている。

いま例として挙げられた吉谷が批判する考え方は、仏教と哲学を比較して、哲学の方に力点を置く立場である。この中には円了の立場は現れていないようであるが、私はこれらの中に含まれていると見て良いと思う。この論文が出されたのは1887年(明治20年)4月である。円了の『仏教活論序論』が出たのはその二ヶ月前である。仏教界で評判となっている円了の『仏教活論序論』、仏教と西洋哲学が一致すると説く考え方に、吉谷は密かに怒りを覚えていたとしてもおかしくはない。

1890年(明治23年)に刊行された『明治諸宗綱要』序文でも「或は一時青年輩の甘心を得んが為に、濫りに仏教と他学と比較する者」<sup>19</sup>が多いと嘆き、その具体例を次のように挙げる。

例へば、唯物論あれば、我に俱舎の三世実有法体恒有の説あり。又彼に唯心論あれば、我に唯識の森羅万有唯心所変の説あり。又彼に哲学の万有虚霊の存在と自覚の関係を論ずるあれば、我に華嚴家の心仏衆生是三無差別の説あり。又彼に靈

性学の主観客観純全の三靈性を論ずるあれば、我に天台家の空仮中三觀円融の談あり。又彼に哲学原理、生物原理の学術あれば、我に真如縁起、法界縁起の理論あり。我、何ぞ彼に劣らんやと、恰も甲乙の両家、互に財産の多少を競争するか如し。嗚呼これ何と謂ふことぞや、<sup>20</sup>

この中の唯物論と俱舎、唯心論と唯識などは円了の仏教哲学一致論を念頭に置いた言葉のように思われる。

吉谷自身は、仏教と世間の学問は、たとえ一致するところがあったとしても、それはただの偶然に過ぎず、本来の性質は全く別物であると考えた。世間の学問が及ばないところがあればこそ、仏教の仏教たる価値があるのであるというのである<sup>21</sup>。さらに「仏教護持の策を講せんとして、反りて自ら害するか如き所業を為して可ならんや」と述べる。これも円了が『仏教活論序論』などで「大法（仏教）を護持し」、「真理のためにあくまでこの教を護持し」、「余が国家のために仏教を護持せざるべからず」などと述べていたことを念頭に置いたかのような言葉である。

では吉谷の姿勢、態度はどうか。これは続く次の言葉に現れている。

今回、明治諸宗綱要を撰述するに当りては、時勢に流れず、虚飾に涉らず、或は新を逐ひ奇を好みて文義を改竄せず、唯古来伝承するところの仏教の義理の正脉を述し、彼々の宗義の当分を記して以て教法の種子を継続せんとす<sup>22</sup>

この言葉からは仏教学の保守本流であるという吉谷の自負が窺える。円了の仏教哲学一致論の前提となったのは吉谷の講義であったと私は考えているが、それにもかかわらず、その円了を吉谷が批判したことを見てきた。ここに歴史の皮肉のようなものを感じる。

## 5. 結語

以上、吉谷覚寿の思想と井上円了との関係を見てきた。簡単に整理すると次のようになる。第一に、吉谷の初期思想は、仏教体系の構築であった。その基本は1882年（明治15）の「因果法爾論」であり、後に1886年（明治19）『仏教大旨』、1890

年（明治23）『仏教総論』と完備されていく。この推移は、因果論を中心として、因果それぞれの部分を拡張していきながら体系を拡充していくものであった。すなわち、因の前提となる「諸法原理」、そして果としての涅槃などである。その中にはキリスト教批判など、同時代の問題も論及されていた。

第二に、吉谷と円了との関係である。吉谷は1881年（明治14）から1890年（明治23）まで東京大学で講義を行った。講義科目は『八宗綱要』、『天台四教儀』などであった。円了は1883年（明治16）に吉谷の講義を受講したほか、1885年（明治18）には、吉谷の講義を筆録したノート『八宗綱要』を作成している。こうした中、円了は吉谷の仏教体系の中、俱舎宗、法相宗、天台・華嚴宗の原理の違いを説く「諸法原理」をもとにして仏教哲学一致論を構想したと考えられる。さらには仏教哲学一致論を体系化していく際にも、吉谷の天台学に基礎を置く仏教講義が影響を及ぼしている。このように、円了が吉谷から受けた影響は大きいと考える。

しかし、吉谷は円了の仏教研究のスタイルには批判的であった。吉谷にとって仏教とは世間の学問とは隔絶した価値を持つものであり、安易に比較や同一視をしてはならないものであった。仏教学の保守本流を自認する吉谷の目には、同じ大谷派の後輩（15歳年下）であり、かつ宗派の学校の教師を養成する教師教校に学んだにもかかわらず宗派には戻らず、仏教と世俗の学問（哲学）とを結合させている円了は許しがたい存在と映ったのかもしれない。ただ、逆にこのような吉谷の反応が、円了の伝統には囚われない、別の言い方で言えば伝統仏教から逸脱した、「革新性」を表わしていると考えられる。

東京大学で円了らを教育した吉谷は、1890年（明治23）に京都に戻り、高倉学寮で大谷派教学の権威となる。村上专精の『仏教統一論』に端を発する大乘非仏説問題について、村上の処分を要求した人物も吉谷であったという<sup>23</sup>。こうした晩年の吉谷を、東京大学時代の学生であった三宅雪嶺は次のように評する。

吉谷氏は後に東本願寺で講師となり、オルソドックスの権威を振ったとの事、講師は最上学職で御講師様と言えば教義に関して最後の判断を下だすの位置に居る。帝大出身者はその為に悩まされ、種々の問題が起こった。吉谷氏は真宗に忠実であったろうが、それが畢竟何の利益になったか。吉谷氏は帝大で知識の利益を得べき者であって、その利益を得ず、次第に頑固になり、折角の学僧が不学僧同様に見えた。<sup>24</sup>

## <参考文献>

### <原典>

吉谷覚寿「因果法爾説」『仏教演説集誌』(明治仏教思想資料集成：明治仏教思想資料集成編集委員会編、同朋舎出版、1983年) p.68-70

同 『仏教大旨』(仏書出版会、1886年)

同 『仏教総論』(吉谷覚寿、1890年)

同 『明治諸宗綱要』(法蔵館、1890年)

同 「仏教を疎漏視すること勿れ」(『令知会雑誌』37号、1887年)

同 「仏教に智力情感の名称を付するの理由無きを弁ず」(『令知会雑誌』50号、1888年)

### <研究書>

ジェームズ・E・ケテラー、岡田正彦訳『邪教/殉教の明治一廃仏毀釈と近代仏教』(2006年、ペリカン社)

拙稿「井上円了『八宗綱要ノート』の思想史的意義」(『井上円了センター年報』22、2013年9月)

<sup>1</sup> 本稿は2014年9月13日(土)に東洋大学にて開催された国際井上円了学会、第三回学術大会で発表したものを修正したものである。発表に際して貴重なご意見、ご質問を賜った先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。

<sup>2</sup> 拙稿「井上円了『仏教活論序論』における真理の論証」(東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』48、2011年)、拙稿「井上円了における神の本体の論証とキリスト教者の批評―『哲学一夕話』第二編をめぐって」(東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』49、2012年)、拙稿「井上円了における伝統仏教体系と仏教・哲学一致論」(東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』50、2013年)

<sup>3</sup> 拙稿「井上円了『八宗綱要ノート』の思想史的意義」(『井上円了センター年報』22、2013年9月)

<sup>4</sup> 井上円了「加藤老博士について」(『東洋哲学』第22編第8号、1915年)

<sup>5</sup> 三宅雪嶺「自分を語る」(『三宅雪嶺』、日本図書センター、1997年) p.171 原著は朝日新聞社、1950年刊行

<sup>6</sup> 拙稿「井上円了『八宗綱要ノート』の思想史的意義」(『井上円了センター年報』22、2013年9月)にて翻刻を行った。

<sup>7</sup> 『仏教演説集誌』(明治仏教思想資料集成：明治仏教思想資料集成編集委員会編、同朋舎出版、1983年) p.68-70

<sup>8</sup> 「因果法爾説」 p.70

<sup>9</sup> 宗密『原人論』(大正蔵 45・708 中)「今略擧而詰之。所言萬物皆從虛無大道而生者。大道即是生死賢愚之本。吉凶禍福之基。基本既其常存。則禍亂凶愚不可除也。福慶賢善不可益也。何用老莊之教耶。又道育虎狼胎桀紂。天顏冉禍夷齊。何名尊乎。」

<sup>10</sup> 『仏教大旨』 p.24-26

<sup>11</sup> 『仏教総論』 p.55-57

<sup>12</sup> 本書は題字を増上寺の福田行誠が記し、大谷派参務の渥美契縁が序を記している。

<sup>13</sup> 吉谷覚寿『仏教大旨』(仏書出版社、明治19年) 緒言 p.1-2

<sup>14</sup> 吉谷覚寿『仏教総論』(明治23年) p.1-3

<sup>15</sup> 吉谷覚寿『仏教大旨』 p.12-13

<sup>16</sup> 「仏教に智力情感の名称を付するの理由無きを弁ず」(『令知会雑誌』50号、1888年(明治21年)5月)「輒近、西洋の哲学者流より我仏教の宗旨を判別するに、智力と情感の名称を付する者あり、即ち云く、聖道門は智力の宗教なり、浄土門は情感の宗教なり云々、是は彼哲学者にして潜かに門外より仏教を窺ひ其法義の何者たるを識別せずして暗推の思想より自家唱説の名称を以て仏教の宗旨に牽強付会せしことなれば、故らに咎むべきことにも非ず」

<sup>17</sup> 同前

<sup>18</sup> この靈性学が何を意味するのかについて学術大会の席で質問を受けたが、よくわからない。主観、客観、純全の三靈性とあることから、ひょっとしてヘーゲルの精神哲学を意味するのかもしれない。

<sup>19</sup> 吉谷覚寿『仏教総論』序文 p.1-2

<sup>20</sup> 同前

<sup>21</sup> 同前「固トヨリ仏教中、或ル部分ハ世間ノ学理ト暗合スル所モアリトイヘトモ、夫ハ唯偶然相似スルノミ、彼此其性質ノ異ナルハ論ヲ俟タス、若シ全ク世間ノ学理ト同一ナリトセハ、仏教ハ出世解脱ノ要法ニハ非サルヘシ、故ニ仏教ハ世間ノ学理ヲ逸脱シテ思想分別ノ及ハサル特殊ノ部分アレハコソ、仏教ノ仏教タル価値ヲ有セリト云ヘシ、」

<sup>22</sup> 同前

<sup>23</sup> 村上専精『六十一年 一名赤裸裸』「伝え聞く、当時、吉谷覚寿君、龍山慈影君の両大徳は、高倉大学寮を代表し、拙著『仏教統一論』の第一編を携さへ、東本願寺の寺務所に出頭し、石川翁に面会を求め、至急本山としての処分を要求せられしと。」(丙午出版社、1914年) p.373-374

<sup>24</sup> 三宅雪嶺前掲書、p.171

(佐藤厚：専修大学特任教授)